

明月譚

宮之脇 文弘（1組）



序幕

遠くには、墨絵のような筑波の山が横霞を腹に巻き、夕暮れには、東天にさやかに浮遊する十三夜の月。西の方からは、上野か浅草の入相の鐘の音が関東平野の地平に這うように余韻を曳きながら幽かに響いてくる。それはまた、古へいざなう郷愁を帯びた余情をも連れている。

ここは都の東、ある地方都市の畑の一角。そこに「竜」という翁が、いつものように丸太テーブルの上に黒千代香を置き、静かにチュウチユウ（酎々焼酎を飲む事）している。

草木は静閑として、斜めに射す月影はそれらに光と陰のグラデーションを形象させている。傍らに自然のままの八重樫の原木が、季節が巡れば白色の豪快な花を咲かせ、今は常緑の葉を照葉させている。樺の一枝には、鳩太郎（竜の日頃の遠慮のない話し相手。竜の影響で時折サツマ弁が混濁する）が羽根を休め、竜を見詰めている。



竜 「異郷の地に来て、異郷のヨミナ（女）と逢魔が時に逢い、誑かされ、異郷で暮らして幾星霜。一方、あのケメ子はどうしたろう。あれは今宵と同じ十三夜。南国の譲り合わなければ通れない細道で遭遇したのは。

彼女は向こうから、ワシはこちらから。数歩の近きに達した時、心の臓の鼓動は早鐘のように鳴動し、そして歩を止めた。彼女も同期したようにピタ

リと静止した。着火された紅蓮の炎に心身は高揚してきた。暫時のしじまが夕暮の中に溶けこんでいった」

鳩太郎（以下Q）「ケメ子とは尋常ではないなあ」

竜 「彼女とワシの相対位置は斜め平行の型となっていた。心悸の亢進に誘発され、ワシはケ〇子と、ほぼ同時に竜〇んとなった」

Q 「はあ、その斜め平行とは、その情念の中にも僅かの羞恥（ゲンネ）という意識が作用していた訳だ。一寸、身を逸らす感じだな。フムフム判る、判いもんだお。微妙な処だな。しかし、何でお互いの名を呼ぶのに一音ずつ欠落するのだ。読み手は“ケ〇”“タツ”と読む恐れはないか。人間、興奮すると言葉は途切れるもんだね」

竜 「そして遂に……」

Q 「一寸、待った。その先は俺に喋らせろ。つまりだな、互いの交感神経はフル稼動し、アドレナリンは出っ放し。そして遂に戦闘開始。あの有名な源氏の君宜しく、地球に打った付け（磔はりつけ）て、為すべからざる行動に走った。そんな単純な筋書きは明々白々。さすがに“上町の竜”と云われた男よ。速戦即決は俺の性にピッタリよ。どうだ、凶星だろ」

竜 「安本丹。お前は戯れせんとや生まれけんか。それに性急でいかん。鳩太郎じゃなく、急太郎が適だ。ユツサ（戦）や物事には、序破急のリズムの変化も必要じゃ。情動に任せ、欣喜雀躍し、ウヒョヒョと、まるで踊念仏か、古代の古い師か呪師のような擬態語を発し奉り、闇雲に暴れまくっちゃ戦果はない。対戦者にも無礼千万じゃし、下手すると人（鳥）権侵害にもなりかねないぞ」

Q 「あありゃ、何やら儀式めいてきたが、俺は馬や鹿じゃない。天空をも自由に飛翔し、平和の象徴でもある貴公子の鳩太郎様よ」

竜 「何が貴公子だ。“文倫カッター”すれすれの台詞を吐きやがって」

Q 「俺が悪いんじゃない。書き手の大馬鹿者が、物語か戯曲もどきか知らんが、この俺様を怪しからぬ鳥に設定しやがって。憶えていろ、卑怯者奴。」

根は謹厳なる神父様よ。ああ主よ、この怪しからぬ言の葉の無品格を許し給え、ラーメン。うんにゃアーメンだ。それで次はどげんなっタッ！」
(1)機嫌斜め)

竜 「そして一步踏み込もうとしたその時、細道の小石に蹠き、更に一步先の木の棒で顔面を強打した。そして脳震盪となった」

Q 「な、な、なんだと。路傍の石コロと棒切れの二段構えの妨害に遭い、拳句の果てにツゴロジンを製造したと。フハッハッハ。何たる無様な醜態よ。おかしくて腸捻転が勃発しそうだ。緊迫感も緊張感もチンガラッ。」

恋は盲目とは能く云ったものよ」

竜 「ワシはツゴロジンは言っていないぞ」

Q 「だってよ、前にツんのめって、ゴロンと転がり、ジンジンした痛みの来襲は正にツゴロジンじゃないか。いっその事、ツンゴロージンとし、これに音の長短・強弱を付けてリズムカルに発音したら、愉快な語感になるじゃないかえ。更にその時の竜さんの表情を表現すれば、“明月や碧々と照るツゴロジン”だな。次はどげんなった」

竜 「気がつくくと、ワシは掌に真新しい手巾を握っていた。夢現の中で微かに、
“……タモンセ、竜ねん”と聞いたたよひな気がするんだ」

Q 「石コロと棒切れは意識外として、斜め平行はヤッセン。平行は永遠に交叉しない。大願成就の前に既にズシをきたしている。離別は必定。ああ色即是空。何という運命の悪戯か。明月は哀し」

竜 「色即是空か。フッフッフ。阿恥羅の方か。鳩太郎らしいの」

Q 「その後、ケメ子さんはどうした」

竜 「それ以来の消息は不明だが、暫く経ってからある人に聞いたのでは、家庭の事情で都へ引越したらしい」

Q 「うんにゃ、いら堪らん。ウスウスしてきた。一期一会でその結末の悲曲」、俺も都の鳩子、いや、ジュリエットが恋しくなってきた。おお、我が愛するジュリエット」

竜 「鳩太郎の奴、ロミオになっているな」(ロミオとジュリエットは兄弟名のようっ)

中幕

鳩太郎は翌日、都の上空から下界を鳥瞰していた。

山の手のある豪邸の芝生を見た。

そこに、白い椅子に座り、陽光に燦く銀髪と大島紬の着物に三重の帯の貴夫人を見遣った。庭の傍らに、玉樹のように仕立てられた椿の一枝で鳩太郎は休息した。貴夫人は一冊の本を開いている。

何か哀切を帯びた表情で本に挟まれた一枚の写真に見入っていた。突然、両の眼からハラリと落ちる二雫の紅涙を垣間見た。鳩太郎その写真を見た。



何と、あそこいつか。それはあの刎頸の友でもある竜翁の若き日の写真であった。余りの驚きに墮ちそうになり、つい、羽根をパタパタさせてしまった。

ハツとしたが、貴夫人は優美な微笑みを浮かべながら“おじゃったもんせ。そげな処に居らんで、こっちへ来やんせ”と。

優しくも典雅な所作と言葉と声韻は、幼くして離別(愛別離)した母鳩に重なり、昔日を彷彿させるものがあつた。

思わず“おっ母さん”と叫び、側に寄り添い、縋り、崩れて号泣したい衝動に駆られるも、体が硬直してどうにもならない。

初めて聴く一婦人の発するサツマ弁の口跡は、艶麗で心地よさと柔らかさを含んだ、ある種の音楽的快感さえも感じた。そしてこの貴夫人がケメ子と云う人に間違いないと直感した。

その時であつた。鳩太郎は不図、この俺に休息と安寧を提供しているこの椿の花の色は何色だろうと。葉の色と形、香りと木肌は、あの白色の八重椿と同じであるが。すると何処からともなく

“鳩太郎様、よくいらっしました。私の花色は深紅でございますよ”と。

夢か幻か精霊(木霊)か。鳩太郎は“ウハエ”と跳びあがりざま、そのまま鳩子の事など一切忘れて、大急ぎで夕刻、竜の処に舞い戻つた。

Q 「ようござんすか竜殿。驚き、桃の木、山椒の木。ケメ子様の居所がわかつたぜ。な、往時の珍談、今の街談巷説でもよか。早く認めてくれ。

都は空を一突きすれば着く。頼む。

この俺を伝書鳩の代りに使ってくれ。

ななに、心配するな。旦那の奴(鳩太郎は旦那様は確認していないが、哀れ、ケメ子様は“金色夜叉II金と色の鬼”の生け贄にされたのだろうと、状況判断し、怨憎を懐いてる)には、わかりやせん。

そつと落し文するだけよ。

そつすれば、それはケメ子様の鼓動と交響し、懐かしい旋律となり、穏や

かに融合し変奏されてゆくと思つせ。俺はケメ子様に枯淡の美を見たね。あのケ高く、メにも美しい凜としたお姿に痺れてしまった(対ケメ子様絶唱)。慈母観音様に邂逅した気分。もう陶酔の境よ。

そしてケメ子と云うお名前の由来も理解できた気がする。な、歌でもよか。因みに、(くに)故郷(去りて異郷で逢いし君なれば熱き涙の慕情沸くらむ)とな。長文はダメ。オイが運搬に難儀すつて。

軽やかに。相聞歌を想定すべし。何を逡巡している。チェスト行け。求めよ、されば与えられんだ。ガッツイもつ、この地コロで田夫野人のガンタリ爺い奴。・・・御免よ竜さん。俺は性急だったよな」

竜 「何があつたか知らんが、ケメ子に対しては、言葉遣いまで転調するな」

Q 「俺は美なるものを見たり、感動した時は、心身は浄化(カタルシス)され、言葉遣いまで転調するのさ。因みに吾輩は、仲間内での綽名は耽美鳥。単なる色ペンタの痴楽鳥じゃなか」

竜 「有り難う、鳩太郎。が、よく聞けよ。誰かの歌にあつた。世の中は月に叢雲花に風思ふに別れ思はぬに添ふだ。不如意なのは世の常。定めは厳しいものじゃ。そのままでもよかよか・・・よかとじゃ」

Q 「義(理屈)を言うな。忘れ得ずして義を言う心の哀しさよ。心の扉を開け。このままじゃ未完成交響曲じゃこわはんか。そして会者定離で終わつてしまひもはんか。

おや、泣いているのか。目頭が。

そうかあ、その目頭に滲む露は愛の黙示。感無量、数十年の溜め涙。筆舌より真実を語るもの。あん、もうそげん泣っきゃんな。泣くよかすっ翔べだ。よかなあ、竜さん。

一期一会の出会いに、一瞬の乱れが久遠の恋情をもたらすとは。

愛が乱調から産まれるとは。竜さんの人生劇の中で一際光彩を放つ濡れ場。うんにゃちこた、愁嘆場。ああ、これが老いらくの・・・。否、枯淡の恋と

云うものか。

ところで竜さん、あんまりチュウチュウしすぎると、唇が腫れるぞ。呑みすぎて丸太に唇をぶっつけるなど云うことだ。

今はな、昔の“雄々しき青春”じゃなかもはんど。

ほんのこて何を為出かすかシンプ（心配）でならん。「こ自愛タモンセ。それからな、俺は常に暇だから心変りしたら、いつでも伝書する」

竜 「ところで鳩太郎、鳩子ちゃんに会えたのか」

Q 「何、あつそつだ。俺は鳩子に、いや、ジュリエットに逢わなくちゃならぬ。

おお、待ってろよ。今すつ飛んで行くからな。他鳩の妻になるな。そげんせんなら掠奪も止むなし。君は心の妻だから。

操を守れ・・・マル秘＝独白＝オラ、守らん」飛び去る。

終幕

空には満月が、その清光を地上に遍く照らしていた。月下に竜翁は、しみじみと眩きました。

竜 「ケメ子様かあ。何故か高貴な薫りまで漂ってくるようじゃ。回想すれば、

少年期に憧れ、仰ぎ見た女子級長さん。延いては後の尋常ではない、匂い立つような羞花閉月の女人。ケメちゃん、ほんのこて、おはんが好っじやっ
タッ！（月下におらぶ・・・）

シロロジンかあ。懐かしいのお。家郷の土、草木の匂いまでも醸し出されてくるようじゃ。明月じゃのお。真如の月か。今宵の焼酎は一入、五臓六腑に染み渡る。よかアンベ（気分）じゃ。ああ、明鏡止水」

その時、天空には照る月影に一对の夕鶴ならぬ夕鳩が、ほがらほがらと数回、旋回した後、月影の彼方に去り行く二羽の鳥影があった。

竜 「ワシは正しく、月下老人」と云うべきか」

あとがき

「心に移り行くよーなし事」を書いていくうちに、結果的に花鳥風月様の叙景・叙情になってしまった。作文する時、少々の酒を嗜みます。それは、脳の活性化と心的制約からの解放です。

「文は人なり」とのフレーズがありますが、どうしても「地」が出てしまいます。「エイヤッ」で遂行。

本文に出てくる「語」や「人」の若干の背景は、次のような動機による。

- 椿・・・庭に山茶花が一本あり、これに数種類の椿を接木。今、見事な花が咲く。
 - 鳩太郎・・・家でインコを二十数年、飼っていた。名前は「ゴン太郎」。
 - 貴夫人・・・文京区の友人宅に昔、招待された時の友人の御母堂。
 - ケメ子・・・貴夫人の名前であるが、出所は全く別の一回り上の飲み友達でいつもの「うちのケメ子（奥さん）はねえー」というセリフ。
- 文の序・中・終幕は、ふと、草野君を思い出して書きました。

